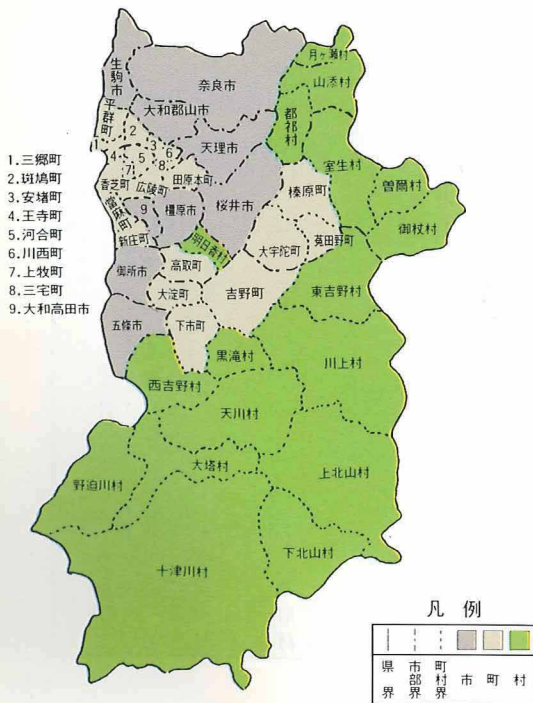


行政区画

市町村数……9市21町17村



位置

近畿の屋根といわれる山岳地帯を南部に持つわが奈良県は、わが国のほぼ中央部、紀伊半島の真中に位置し、周囲を山岳に囲まれた内陸県である。

	経緯度	位置
東端	東経136度12分	宇陀郡御杖村大字神末
西端	東経135度33分	吉野郡野迫川村大字弓手原
南端	北緯33度52分	吉野郡十津川村大字竹筒
北端	北緯34度47分	生駒市高山町

東西の距離 64.13km

南北の距離 102.22km

県庁所在地 奈良市登大路町

面積

奈良県の面積は、全国面積(377,719.76km²)の約1%の3,690.41km²である。

吉野郡十津川村は全国1位の巨村で県総面積の18.2%を占め672.35km²である。また本県最小は、磯城郡三宅町で4.05km²である。

	面積	割合
奈良県	3,690.41km ²	100.0%
市部	698.16km ²	18.9%
郡部	2,992.25km ²	81.1%

地 形



紀伊半島

本県の地形は、県のほぼ中央を西流する吉野川を境として北部の低地帯と南部の山岳地帯に分かれている。その吉野川にほぼ沿って中央構造線が通り、北部は内帯、南部は外帯に属しており、非常に対照的な地勢を示している。

★北部低地帯……複雑な丘陵と小盆地からなり、大別すれば大和高原、宇陀山地、奈良盆地からなり吉野郡を除くほとんどの市町村はこの北部低地帯に属している。

大和高原は奈良盆地と上野盆地にはさまれた高原で、北は木津川、南は初瀬川、宇陀川によってくぎられていく。ほぼ400～500mの標高をもち、なだらかな小丘陵が起伏、河川は少ない。添上、山辺郡の各村があり古くから開発されている。山添村では縄文時代草創期の土器が発見されている。

宇陀山地、宇陀盆地、高見山地、室生火山群および竜門山地（独立地形区とも考えられる）からなる複雑な地形区は、大和高原の南方に位置し東部は鈴鹿山脈・布引山地に接し、西は竜門山地を経て金剛山地に、南は吉野川に沿う中央構造線におよぶ。

奈良盆地は県の北西部を占めており、面積は約300km²で、盆地底の標高が40～80mの沖積層盆地である。盆地面積は県全体の8%にすぎないが、この平坦で肥沃な地域は水田耕作に適し、古代には国政・文化の中心地であった。今も県の中核的位置を占めている。

河川は盆地の四周から小河川が集まってきている。それらは大和川となって大阪湾へ注いでいる。

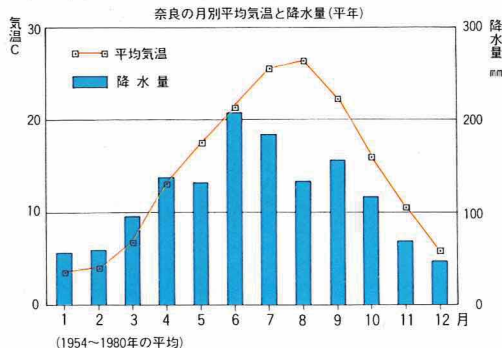
また奈良盆地と大阪平野を隔てる金剛山脈が南北に走り、標高1,125mの金剛山をはじめ、葛城山、二上山、生駒山などの山々が約45kmにわたって連なっている。成因は断層作用によるが、二上火山群なども含む地形区である。

★南部山岳地帯……県総面積の60%以上を占めるこの地区は、紀伊山地の主部にあたり、東部の大台ヶ原山(標高1,695m)を中心とする台高山脈、西部の伯母子山地、さらに中央部の十津川、北山川の深い渓谷にはさまれて大峰山脈が連なる大山岳地帯である。その雄大な壮年期の地勢は北部低地帯とは対照的である。

また河川は、吉野川、北山川、十津川などいずれも壮年期河川が深いV字渓谷をなして曲流し、山岳美と渓谷美にすぐれている。この地域は吉野熊野国立公園の主要部であり、林産資源とともに本県の重要な観光資源となっている。

気 象

本県の気候はその地形と同様南北で大きく相違する。気候区分によると吉野川を境として、南部は山岳で占められ山岳性気候、北部は盆地で内陸性気候である。東部山地は内陸性気候と山岳性気候の特徴を兼ねている。すなわち南部の山地は夏は雨が極めて多く、時には局地豪雨が起り、冬はきびしい冬山の様相を呈し、積雪もかなり深い。一方奈良盆地はおおむね雨は少なく、夏はむし暑く、冬は底冷えがきびしい。一般的には台風のような大きな現象による影響よりも、むしろ地形の複雑さによる大雨、河川の氾濫、山・がけ崩れ等の災害と局地的な強風が目立っている。また盆地、高原地方では夏の干ばつ、冬の夜間冷却による異常低温、霜及び霧の発生等の気象災害もしばしば起こる。



人 口

石器の材料サヌカイトの産地二上山をもつ奈良県では旧石器時代からすでに人々が活動していたことが知られている。

先史時代の遺跡数から人口を推計した研究によれば、近畿の人口は縄文時代にはほぼ300人～4,400人の間で推移していたが、弥生時代には108,300人程に急増したとされている。本県の人口の推移もこれと軌を一にしていたとみられ、稲作の普及と共に人口が急増し後の大和朝廷成立を促す社会的・経済的な基盤を確立していったのであろう。

大和に朝廷が成立し政治・文化の中心地となると、その都の人口は巨大なものとなった。藤原京の人口は1～3万人といわれ、これに続く平城京は少なくみると7万人前後、多く見積って20万人の人口を持ったといわれる。仮に20万人説をとるならば、平城京内の人口密度は、14,000人/㎢程になり、唐の長安よりやや少なく昭和62年の大阪市(12,400人/㎢)より多くなる。7万人程であったとしても奈良の都は当時世界有数の大都市であったことには変わりはない。

また、奈良時代の平城京を除く大和の人口については13万人説と6万5千人説とがある。当時の政府が必ずしも全ての人々を把握していないため、実際の人口はどちらの推計でももう少し多かったであろう。

中世の人口は史料がないため知ることができないが、江戸時代になると八代將軍徳川吉宗の時代の享保6年(1721)から始められた全国人口調査がある。第2回目は同11年に実施され、以後6年毎に行われた。この調査は、武士の人口や年少者の人口などが除かれていることなどいくつかの問題があり、実際の人口よりいくぶん過少であると思われる。しかし、現存している史料によって計10回分の大和国の人口を知ることができる。

享保6年の413,331人を100とすると、天明6年(1786)には336,254人、81.4にまで減少するが、文化・文政の頃から増加に転じ弘化3年(1846)には361,157人、87.4にまで回復している。



明治の初めには、本県の人口もほぼ実勢に近い数字が得られるようになり、明治5年(1872)には423,004人となっている。奈良県再設置当時の明治20年(1887)には491,185人であり、幕末以来の人口増加がさらに進んだことを示している。

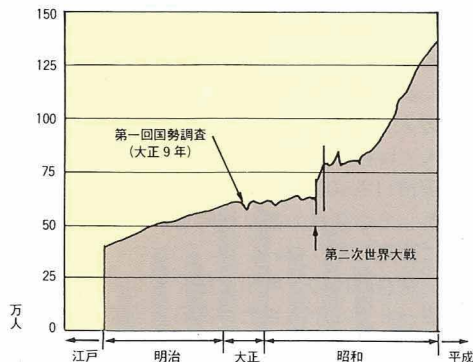
大正9年(1925)の第1回国勢調査の人口は564,607人であり、明治5年から約半世紀の間に33.5%の増加を示したのである。

その後、人口は60万人程度で安定していたが、昭和20年代には戦時中の疎開者、戦後の引き揚げ者の流入にベビーブームが重なったため、一挙に80万人近くに増加した。昭和35年以降には盆地部での過密化と山間部での過疎化が同時に進行したが、県全体としては著しい人口の増加をみることになる。国勢調査において対前回増加率をみると昭和45年で12.6%、55年では12.2%と高い伸びを示した。60年調査では、人口は1,304,866人であり伸び率は7.9%とやや鈍化している。

本県では昭和38年以来一貫して人口が転入超過であり、40年代、50年代の高い人口増加率の要因はおもに大阪を主とする他府県からの人口の流入によってもたらされた。これは県内産業の発展による労働力の吸収によるものと言うよりは、特に北西部地域が大阪大都市圏の通勤圏として包含され、ベッドタウンとしての役割を求められたためである。

従来、流入人口の就業先のかなりの部分が大阪府にあり、買物も大阪指向であると言われるように人口の急増は本県産業の発展に直結しなかった。しかしながら、この急増した人口は潜在的な購買力として、また、潜在的な労働力として今後の本県の産業発展を支える重要な支柱ともみることができる。

明治以降の奈良県人口の推移



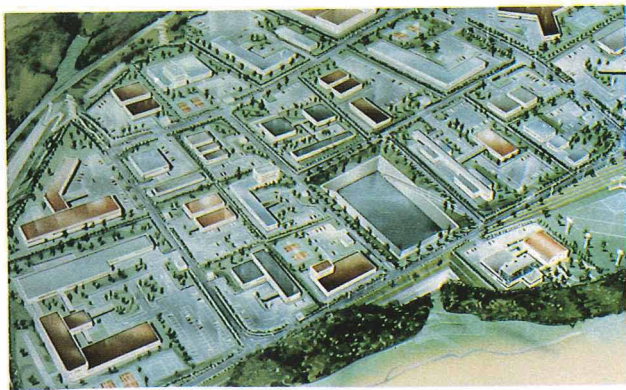
産 業

古代より農耕文化が発達し、奈良盆地の開発が進んだ本県では、中世に二毛作が始まり、近世になると綿花や菜種、煙草等の商品作物も広く栽培された。農村は奈良晒や綿織物に代表される都市手工業や農村工業に原料を供給し、奈良や高田に問屋を発展させる原動力になった。

これをうけて、明治7年(1874)には奈良県は全国府県中、農具が4位、綿糸が5位、綿織物が7位、菜種油が9位の生産額をあげ、全国でも先進的な地域に属していた。

伝統産業資本の資金が豊富であった奈良県では、明治16年(1883)には早くも近代的紡績工場が設立され、県民の先進性がうかがわれる。しかし、この工場は成功にはいたらず、後に近代的紡績工場は奈良県に根付いたものの、県の位置が東西交通の幹線からはずれていたこともあり、工業生産額が農業生産額を上回るのは大正8年(1919)にもちこされたのである。

明治末から昭和にかけて農業では1反あたり稲の収穫が「奈良段階」とよばれ全国1の水準まで上昇した。



テクノパーク・なら完成イメージ

また大和スイカも大阪市場と直結している交通の便を生かして発展し、昭和5年には栽培面積が1,073haに達した。伝統産業も大きく発展し、大和郡山の金魚は明治の末から海外へ輸出され、置き薬は昭和10年には工業生産額の5分の1を占めるにいたる。江戸時代から育林が始まった吉野郡の林業も筏流しから陸送へ移行するにつれ、しだいに和歌山資本からの独立色を強め、桜井に木材工業を発達させる契機をもたらした。

昭和の初めには、紡績業の生産は安定し、木綿や緋に代わったメリヤス、貝ボタン、靴下、皮革などの地場産業の産地の形成も進んだが、戦争のために挫折するものが多かったのである。

戦後、奈良県も復興の途についたが、本県の工業は農村に基盤をおく零細規模の軽工業が多く、昭和30年代の高度経済成長期にも繊維、木材、食料品等の業種が大きなウエイトを占めていた。本県は内陸に位置し港湾をもたないで、重化学工業には工場立地の上で制約が大きかったからである。

このため、昭和30年代末から県では工業団地をつくり内陸型工業の誘致・育成に努め、また、県内中小企業の活力を引き出すため中小企業団地をつくっている。最近では五條市にインテリジェント工業団地としてテクノパーク・ならの開発を進めている。

高度成長期の日本経済の急激な変化は、盆地部での大阪等からの人口流入とそれにもなう都市化・工業化、山村の過疎化という形で奈良県にも波及し、就業構造を大きく変化させた。

国勢調査によって第1回調査である大正9年と高度経済成長期直前の昭和30年、最新の昭和60年の3時点の15歳以上就業者数とその構成比をみると、奈良県が農業県から工業県に移り変わっていき、特に30年以降の変化が著しいことがよく分かる。

昭和62年の産業構造を県内総生産からみると第1次産業が2.7%、第2次産業が34.4%であるのに対し第3次産業が50.4%であり半数以上を占めている。

産業別就業者数の推移 (単位:人、%)

区 分	大正9年		昭和30年		昭和60年	
	就業者数	構成比	就業者数	構成比	就業者数	構成比
農 業	106,780	48.9	125,946	38.5	32,436	5.7
林 業・漁 業	5,925	2.7	9,866	3.0	3,605	0.6
鉱 業	333	0.2	741	0.2	91	0.0
建 設 業	5,571	2.6	17,138	5.2	41,724	7.4
製 造 業	38,278	17.5	56,933	17.4	144,654	25.6
卸・小売業、飲食店	22,656	10.4	43,497	13.3	127,172	22.5
サービ 業	18,320	8.4	38,022	11.6	126,905	22.4
その他の産業	20,191	9.3	35,222	10.8	89,470	15.8
合 計	218,054	100.0	327,365	100.0	566,057	100.0

農 業

奈良県の農業生産構造については、生産の基盤である耕地面積が都市化の影響によりここ10年来、毎年1%程の減少を示しており、平成元年には28,000haとなっている。経営規模は0.5ha以下の農家が半数以上を占めるが、一部地域で行なわれている農地開発事業の進展にともなって1.5ha以上の農家数の伸びが著しい。

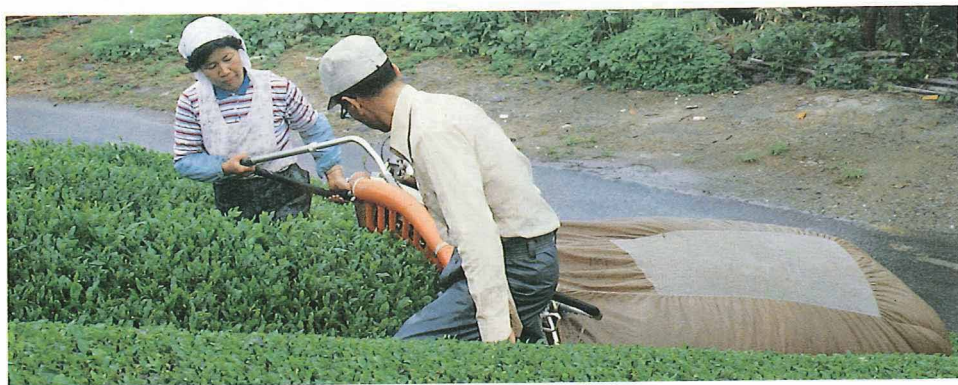
平成元年の総農家数は45,950戸でそのうち専業農家が10.4%を占めるにとどまり、農業所得への依存度も昭和63年で12.7%と低い。農業従事者の高齢化も進んでおり、基幹的農業従事者数のうち60歳以上が52.4%にのぼっている。このため、優良農地の確保、中核農家の育成等の

農業生産構造の改善が重要な課題となっている。

農業生産面では、野菜・果樹・花き・茶・畜産等収益性の高い生産団地が形成され、需給動向に即応した農業が展開されている。特に茶・かき・いちごは「大和茶」・「奈良の柿」・「奈良いちご」として全国市場に定着している。

流通面でも県中央卸売市場の円滑な運営を通じて生鮮食品の価格安定を図っている。

今後は地域の特性に応じた魅力ある農業の確立とゆとりとやすらぎのあるふるさとづくりを目指し農業・農村の活性化を進めるとともに、県民の健康的で豊かな食生活の確保を図る必要がある。



大和茶

林業

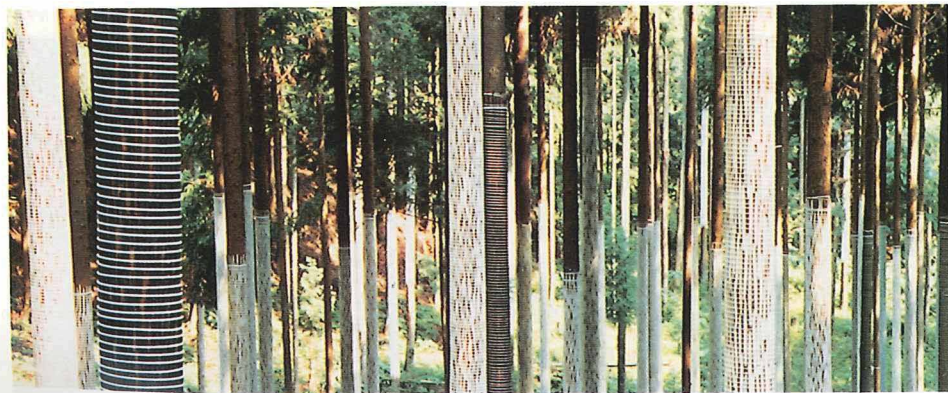
本県の林業は、県総面積の78%を占める豊富な森林面積と膨大な木材の蓄積を背景に県の基幹産業としての地位を占めてきた。

特に吉野山間地域は気候条件にもめぐまれ、さらに山林所有の大半が民有であったことが山林経営にも独創的な形となって現れ、このため本県林業は全国林業界でも有力な地位を占めている。古くから行なわれている独特の密植方法の結果1haあたり175m³（民有林）と全国平均の約1.5倍の蓄積（平成元年4月）、吉野杉で代表さ

れる良材の産出など、その山林経営の足跡は全国的に高く評価されている。

また吉野・桜井方面に発達した木材工業は、こうした林産資源の加工供給ルートとして現在も本県地場産業において大きな位置を占めている。

しかしながら、近年における山村の過疎化に伴い、林業労働者の減少、高齢化の進行、また外材との競争の激化、代替材の進出、住宅建設における木材率の低下による木材需要の伸び悩み等林業をとりまく環境は厳しい状況である。



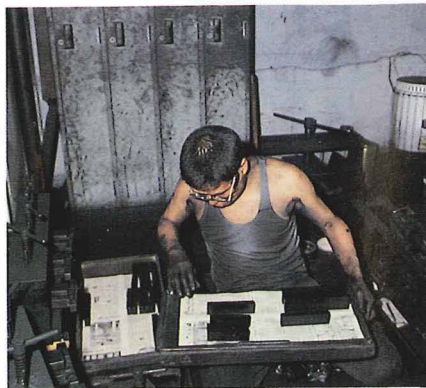
吉野杉の人工絞丸太

工 業

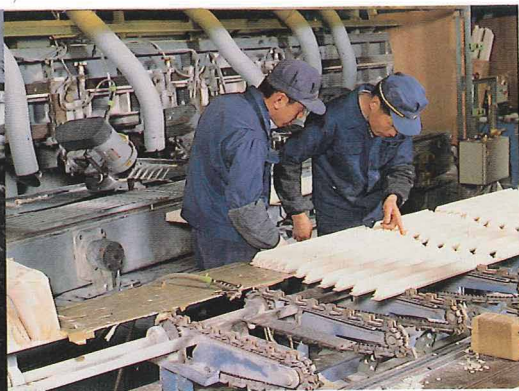
奈良県の工業の中には墨・筆・和紙・薬・漆器・素麺・清酒・茶・割箸・赤膚焼・奈良晒など江戸時代、あるいは古代、中世にまでさかのぼる長い伝統をもつものが多い。

現在、産業の中心となっているのは、日本三大美林の一つ吉野杉を背景にした木材業、靴下・ニット・織物等戦後の高度成長期に著しい成長を遂げた繊維業、同じく高度成長期に県外大資本が導入され大企業の占めるウエイトの高い電気機械・一般機械・金属業などである。

近年の円高定着により経済環境はきびしいが、木材工業では内需型経済への移行にともなう住宅着工の増加により生産は順調に推移している。また、繊維業界では、N I E S（新興工業経済群）等からの製品輸入の増大、消費者ニーズの多様化、高級化に対応するため製品のファッション化、高品質化を図っている。他の業種についても、息の長い景気拡大に支えられて総じて順調に推移している。



墨作り



プラスチック工場

商 業

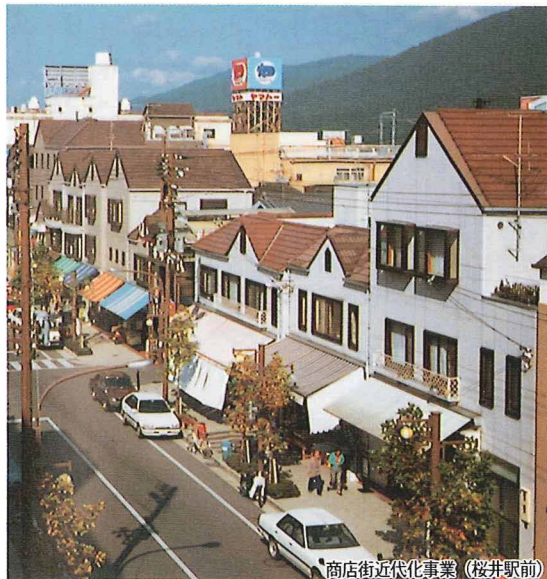
江戸時代には門前町であった奈良町、郡山藩の城下町として栄えた郡山が、最盛期にはそれぞれ2万人以上の人口をもつ2大商業中心地であった。高田、御所なども農村加工品の流通の中心地として発展していた。しかし、このころから奈良県は大阪の経済圏に包含され本県全体を掌握する中心地はできず、時代が明治に至ってもこの状態は変わらなかった。

明治25年の関西線の開通、大正3年の大軌電車（今の近鉄）上本町～奈良間の開通をはじめとする鉄道網の整備は観光客を増やし、新たな商店街の形成をみるところもあった。

しかし、当時の商業は主に農家を相手の小規模なものが多く、大正時代には米価の下落の影響で打撃を受けるものもあった。昭和5年の国勢調査によると、商業従事者（当時の職業分類）のうち、家族の補助も受けず自分1人で営業しているものが32%も占めていた。

昭和9年には県内4銀行が統合して南都銀行が生まれ、28年には三栄相互銀行（現、奈良銀行）が奈良市に設立され、本県に支店を持つ県外の銀行とともに奈良県の商業の発展に貢献している。

昭和40年代以降、大阪等からの人口の流入が著しく、これに伴い商品販売額等も増加した。昭和63年の調査では、小売業の年間商品販売額等は前回の調査時に比べ



全国1位の伸び率を示している。しかし、大阪等への消費流出は大きく、奈良県の商業の一層の発展を図るために、その流出している購買力を引きとめるよう、今後は、県民のコミュニケーションの場となるような魅力ある商業を育てることが望まれる。

文化・観光

本県の文化の萌芽はきわめて早く、多くの縄文・弥生時代の遺跡や、広大な前方後円墳を中心とした無数の古墳群がそれを物語っている。そのため、本県がわが国において占めた文化的地位はきらびやかなものであった。古墳時代の終りからわが国の政治権力は和に集中し、文化もまた、飛鳥・奈良時代にシルクロードを経てもたらされた文化を吸収しながら、この地を中心に花開いたのである。

都が京都に移って後も、社寺を中心とした奈良の地は、南都と呼ばれ、その文化的風土は能や狂言を生み出す土壌となり、近世の奈良詣・初瀬詣にもみられるように、日本の文化のふるさととして、今に受け継がれてきたのである。

そのはなやかな文化遺産は、豊かな自然とともに県下のいたるところに数多く残され、新しい現代の文化と融合し、本県独特の風土を造り出しているのである。

これらの豊富な文化遺産、歴史的風土の保存と、近年の急激な都市開発とをいかに調和させるかが、県政の重要な課題となっている。昭和59年に策定された「奈良県長期基本構想」でも“文化観光県”をめざすことを県政運営の基本方向の一つとしてあげ、毎年的重要施策の中に取り入れられており、関西文化学術研究都市への参画や、昭和62年の奈良県置県100年記念事業、63年の'88な

ら・シルクロード博の開催、平成元年の奈良シルクロード博記念国際交流財団設立等、着々と国際文化観光県としての道を歩んでいる。

県民の文化向上のために、県文化会館、県橿原文化会館、県立美術館、橿原公苑、県立民俗博物館、県立橿原考古学研究所附属博物館、県社会教育センター、国際奈良学セミナーハウス等を開設し、平成元年には新公会堂（表紙写真）も完成した。また、青少年野外活動センターや、近年各市町村により多くの文化・教育体育施設が建設され、県民の文化生活に大きく寄与している。



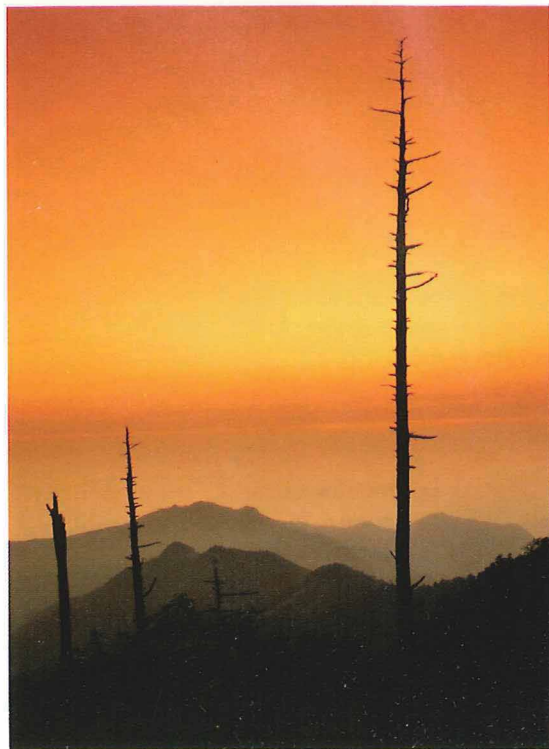
新公会堂におけるわかき能

本県の観光は、奈良盆地を中心とした史跡・古社寺などの文化財観光と、山岳地域の自然観光に大別される。

奈良、斑鳩をはじめとする各地の古社寺には、飛鳥・天平などの各時代を代表する仏像や建築物が数多くあり、国宝・重要文化財の数は、東京、京都についで多い。古社寺のほかにも、飛鳥・藤原・平城の宮跡や南朝のおかれた吉野の地などの史跡も多く、歴史の舞台を訪れるひとびとは後をたたない。

また、千年以上の歴史をもつ吉野山の桜や、葛城高原のつつじなど季節の花々や、大台ヶ原の景観、大和アルプスと称される大峰山脈を中心に2,000m級の山々が連なる吉野熊野連山の雄大な自然が、全国的な都市化によって緑が失われていく中で、今もなお美しい姿を残し、ひとびとにこころの安らぎを提供しているのである。

これらの豊富な文化遺産と、豊かな自然をもとめて、年間4千万人ものひとびとが、本県を訪れている。観光が、「物見遊山」から人間性のかん養へとうつり変わりつつある時代、観光奈良県は、おのずとその価値を増しつつあるのである。



大台ヶ原の夜明け

主要山岳一覽表

(單位：海拔m)

山岳名	標高 _m	所在地	山岳名	標高 _m	所在地
若草山	342	奈良市	行者還岳	1546	吉野郡天川村
春日山	496	"	八劍岳	1915	吉野郡上北山村
耳成山	140	橿原市			(天川村境)
天香久山	152	"	仏生ヶ岳	1805	吉野郡上北山村
畝傍山	199	"			(十津川村境)
竜王山	586	天理市	釈迦ヶ岳	1800	吉野郡十津川村
		(桜井市境)			(下北山村境)
卷向山	567	桜井市	孔雀岳	1779	吉野郡十津川村
生駒山	642	生駒市			(下北山村境)
		(大阪府境)	大日岳	1593	"
二上山	474	北葛城郡當麻町	大神野山	619	山辺郡山添村
(雌岳)		(大阪府境)	鎧岳	894	宇陀郡曾爾村
葛城山	960	御所市	兜岳	920	"
		(大阪府境)	高取山	584	高市郡高取町
金剛山	1125	御所市			宇陀郡曾爾村
		(大阪府境)	俱留尊山	1038	(三重県境)
荒神岳	1260	野迫川村	高見山	1249	吉野郡東吉野村
護摩壇山	1372	十津川村			(三重県境)
		(和歌山県境)	国見山	1419	"
山上ヶ岳	1719	吉野郡天川村	三津河落山	1654	吉野郡上北山村
稲村ヶ岳	1726	"			(三重県境)
大普賢岳	1780	吉野郡上北山村	日出岳	1695	"
		(川上・天川村境)	玉置山	1076	吉野郡十津川村
		"			吉野郡野迫川村
国見岳	1655	(天川村境)	伯母子岳	1344	(十津川村境)

主要河川一覽表

(延長10,000m以上)

平成元年3月31現在

河川名	延長	上流端	河川名	延長	上流端
m			m		
淀川水系	286,100		布留川	11,220	天理市苜原町字下代
宇陀川 <small>(黒川を合む)</small>	26,160	宇陀郡大字陀町大字宮奥	岩井川	10,150	奈良市紀寺町字中谷
布目川	24,000	天理市福住町字馬返	紀の川水系	350,290	
青蓮寺川	16,850	タコラ川の合流点	紀の川 <small>(吉野川を合む)</small>	70,050	吉野郡川上村(三ノ公川合流点)
名張川	16,300	オオクタ川の合流点	丹生川	32,100	吉野郡黒滝村大字中戸
白砂川	14,700	奈良市横田町	高見川	22,300	吉野郡東吉野村大字杉谷
笠間川	14,400	山辺郡都祁村大字吐山	津風呂川	17,600	宇陀郡大字陀町大字栗野
室生川	13,400	宇陀郡室生村大字田口	四郷川	13,200	吉野郡東吉野村大字麦谷
芳野川	13,240	宇陀郡菟田野町大字岩端	宗川	12,000	吉野郡西吉野村大字西日裏
遅瀬川	11,800	山辺郡山添村大字切幡	新宮川水系	414,612	
打滝川 <small>(今川を合む)</small>	10,300	奈良市別所町	新宮川 <small>(小湊川・天川を合む)</small>	113,700	吉野郡天川村大字北角
大和川水系	591,332		北山川	50,540	吉野郡上北山村大字西原
大和川	42,371	桜井市大字小夫地先	川原樋川	27,800	吉野郡野迫川村大字桧股
曾我川	26,896	御所市大字重阪	西川	22,100	吉野郡十津川村大字小坪瀬
寺川	23,270	桜井市大字鹿路	東の川	14,500	吉野郡上北山村大字小椽
葛城川	23,246	御所市大字鴨神	上湯川	13,200	吉野郡十津川村大字上湯川
飛鳥川	22,296	高市郡明日香村大字栢森	西の川	12,900	吉野郡下北山村大字池峯
富雄川	21,614	生駒市高山町	神納川	12,300	吉野郡十津川村大字杉清
佐保川	14,823	奈良市中ノ川町	旭川	11,100	吉野郡十津川村大字旭
葛下川	14,740	北葛城郡當麻町大字南今市	中原川	11,000	吉野郡野迫川村大字上
高田川	13,045	北葛城郡新庄町大字南藤井	小原川	10,840	吉野郡大塔村大字篠原